
ウィルフレッド・ビオン

ロサンゼルス・セミナーとスーパーヴィジョン

W・R・ビオン著

ジョゼフ・アグアヨ,

バーネット・D・マリン編著

福本 修訳

金剛出版, A5判 270頁, 5,060円, 2025年11月刊

(さくら精神分析研究室) 清野百合

英国の精神分析家ウィルフレッド・ビオン (Wilfred Bion) は、1967年4月に米国ロサンゼルスにて約1週間にわたり、セミナーやグループスーパーヴィジョンを行いました。本書はそのセミナーシリーズの記録です。編者の一人であるバーネット・D・マリンはロサンゼルス新精神分析センターの精神分析家ですが、彼の父アーサー・マリンもまたロサンゼルスの精神分析家であり、そのアーサー・マリンがビオンのこのセミナーシリーズに参加し、それらを録音

していたことで、この貴重な記録を私たちが目にすることが可能となりました。

ビオンの思索は1960年代半ばを境に大きく変化するとわれ、変化後は「後期ビオン」と呼ばれています。1967年に行われたこのセミナーは、まさにその後期ビオンの理論の始まりの時期であり、彼が「O／究極の現実／絶対的真実」と呼ぶ不可知の存在や、治療者への「記憶と欲望を控えること」の提唱など、これ以降彼が論じることとなる概念や考えについて、彼は本セミナーにおいて繰り返し語っています。理論書とは異なり、ビオンが聴衆に理解してもらおうと平易な言葉遣いを心がけていることもあって、本書は、難解と言われる後期ビオンの思考を理解する糸口となってくれるように思います。また、本書の特徴として、ビオンが自身のケースを提示しているという点も挙げられます。ビオンは1960年代以降、理論書の中で自身の症例をまとまって提示することはほぼありませんでしたので、本書は彼の臨床実践を垣間見る貴重な機会を与えてくれています。

また、本書にはビオンと聴衆のやり取りもそのまま掲載されています。ビオンの紹介したまったく新しい考え方に多くの聴衆が戸惑った様子が見て取れますし、中でも、当時米国の自我心理学を牽引していたグリーンソンとビオンのやり取りは読みごたえがあります。訳者である福本修氏による巻末の解説では、二人の考え方の違いについて、また講演の背景やビオンの思索について詳しく解説されており、読者が本書を深く理解するための貴重な手引きとなっています。

最後に、付録についても触れておきます。本書にはビオンの論文「記憶と欲望に関する覚書」が付録として掲載されています。本論文は当時米国西海岸で刊行されていた専門誌『精神分析フォーラム』誌上で1967年秋に発表されたのですが、そこには数名の分析家の論評とそれらに対するビオンの応答も併せて掲載されており、これらも本書付録の中に収められています。こうした資料もまた、当時のビオンの斬新なアイディアに対する周囲の反応に関する貴重な資料だと考えます。

ビオンは1968年にロンドンからカリフォルニアへ移住しましたが、前年に行われた本セミナーがその契機になったとも言われています。後期ビオンに関心のある方は、ビオンに大きな決心を促した本セ

ミナーの記録を、是非一読されることをお勧めします。

原書：Wilfred R. Bion, Joseph Aguayo, Barnet Malin (Ed) : Wilfred Bion : Los Angeles seminars and supervision
